

第5節 実施の効果とその評価

1. 生徒・教職員・保護者への効果

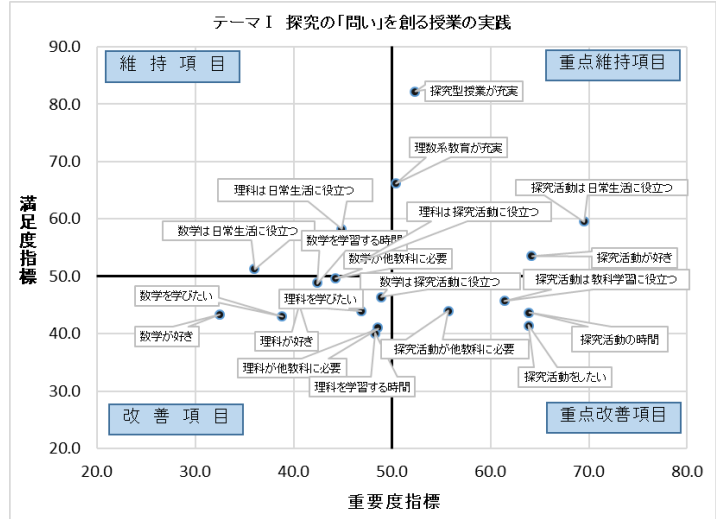
(1) 生徒

令和7年1月に3年207人、2年209人、1年167人(有効回答)を対象に、Google formを用いたアンケートを行う。アンケートは選択肢回答法 (Closed-ended question)・単数回答法 (SA: Single Answer) で間隔尺度 (強制選択尺度[4件法 4: 肯定, 3: やや肯定, 2: やや否定, 1 否定]) の回答をポートフォリオ (CS ポートフォリオ) 分析する。研究開発の仮説を総合評価に設定し、個別評価要素の重要度指標と満足度指標を得て、重点的改善要素を抽出する。(④関係資料第6節 研究開発の分析の基礎資料・データ参照)

I 併設型中高一貫教育校として、学際的な理数教育と探究の「問い」から価値を創造する授業デザインの実践

[仮説 I] 教科の枠を越える学際的な理数教育、探究の「問い」を創る授業をデザインすることによって、新たな価値を資質・能力を高めることができる。

質問	n=583	平均	重要度指標	満足度指標	改善指標
数学が好き		2.33	32.5	43.3	-5.04
数学を学びたい		2.33	38.8	43.0	-1.92
数学は日常生活に役立つ		2.44	36.0	51.3	-7.87
数学が他教科に必要		2.40	44.2	49.7	-2.69
数学を学習する時間		2.43	42.4	48.8	-3.11
数学は探究活動に役立つ		2.38	48.9	46.4	1.19
理科が好き		2.37	40.6	45.3	-2.14
理科を学びたい		2.36	46.8	43.9	1.35
理科は日常生活に役立つ		2.57	44.9	58.2	-8.30
理科が他教科に必要		2.28	48.5	41.1	3.57
理科を学習する時間		2.29	48.3	40.0	3.97
理科は探究活動に役立つ		2.49	46.8	52.7	-3.96
理数系教育が充実		2.72	50.3	66.2	-7.89
探究活動が好き		2.51	64.2	53.5	5.04
探究活動をしたい		2.34	63.9	41.4	13.94
探究活動は日常生活に役立つ		2.59	69.5	59.6	4.55
探究活動が他教科に必要		2.35	55.7	43.9	8.18
探究活動の時間		2.38	63.9	43.6	11.87
探究活動は教科学習に役立つ		2.41	61.4	45.8	8.81
探究型授業が充実		3.04	52.3	82.2	-14.67
平均		2.45	50.00	50.00	
標準偏差		0.17	10	10	



満足度指標、重要度指標の二軸から重点維持項目、維持項目、重点改善項目、改善項目の要素を分類した結果、「理数系教育の充実」「探究型授業が充実」「探究活動は日常生活に役立つ」「探究活動が好きである」などの項目で高い満足度を得ることができ、探究活動及び理科・数学と日常生活の関係性の要素が「既成概念にとらわれることなく社会の問題を発見・解決し、新たな価値を創造する資質・能力」の育成に寄与していることが示された。探究活動の時間や意欲、教科学習への影響においても高い満足度が確認できた。一方、「探究活動の時間の確保」「探究活動への興味」「探究活動が他教科に必要である」「探究活動は教科の学習に役立つ」などの項目においては優先的に改善する要素であることが示された。数学・理科以外の教科における探究活動において、満足度指標が低く、重点改善項目に挙げられる。それらの教科学習においても、問題解決の場面を作り出し、探究の「問い」を創る授業を充実させた上で、学力の三要素のバランスを重視した適切な観点別評価を実施させることが必要であると考えられる。

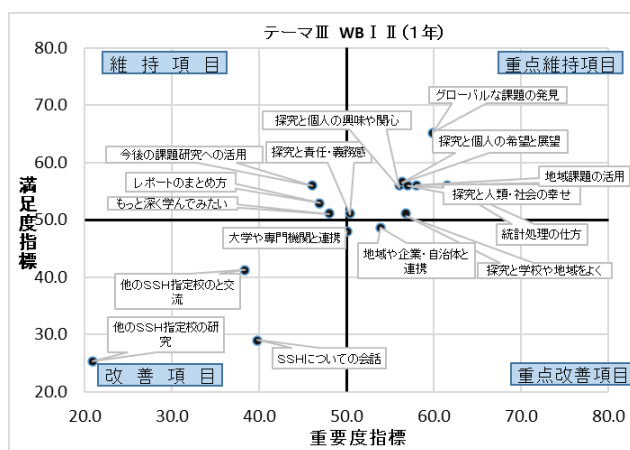
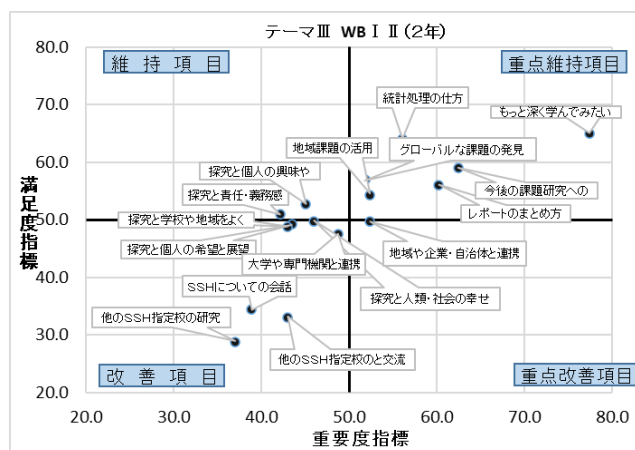
Ⅱ 併設型中高一貫教育校として、社会と共創するためにUTO-LOGIC⁽¹⁾を駆使する探究活動の実践

[仮説Ⅱ] 中高において、教科との関わりを重視し、社会と共創した探究活動に取り組むプログラムを実践することによって、社会と共創するためにUTO-LOGIC⁽¹⁾を駆使して探究を深めることができる資質・能力を育てることができる。

質問	3年SSコース n=52				2年自然探究コース n=127				2年社会探究コース n=82				1年 n=167			
	平均	重要度指標	満足度指標	改善指標	平均	重要度指標	満足度指標	改善指標	平均	重要度指標	満足度指標	改善指標	平均	重要度指標	満足度指標	改善指標
説明の一般性	2.87	53.9	43.4	6.48	2.62	63.6	38.6	16.74	2.38	52.9	45.3	4.68	2.66	56.8	45.2	7.40
説明の確実性	3.08	60.3	62.5	-0.98	2.44	55.9	60.5	-2.09	2.33	31.8	61.1	-18.05	2.39	49.5	61.7	-6.20
説明の一貫性	3.00	66.8	56.1	4.98	2.71	54.0	58.4	-2.01	2.52	45.8	58.4	-7.47	2.70	52.3	58.6	-2.99
説明の対照性	3.00	61.6	46.6	8.25	2.69	48.1	58.4	-5.52	2.52	53.3	50.6	1.29	2.66	62.7	54.0	4.08
説明の論理性	2.81	54.2	33.9	11.05	2.65	55.6	41.7	8.80	2.40	51.4	34.9	8.52	2.57	50.9	41.1	5.07
情報の正確性	3.13	48.1	62.5	-7.51	2.48	29.3	64.7	-22.65	2.21	39.0	68.9	-18.27	2.35	43.1	69.0	-14.54
研究の妥当性	3.15	50.9	62.5	-5.67	2.76	37.0	63.6	-18.57	2.62	49.2	46.6	1.18	2.88	48.0	55.0	-3.98
研究の再現性	2.96	55.9	59.3	-1.54	2.72	34.8	56.3	-12.35	2.38	26.1	46.6	-9.93	2.59	55.2	47.3	4.74
研究の正当性	2.98	52.8	52.9	-0.07	2.66	53.7	48.0	3.44	2.38	43.6	42.7	0.39	2.48	55.4	42.1	8.46
研究の客観性	2.90	50.7	49.7	0.54	2.57	39.5	48.0	-4.04	2.33	58.1	44.0	9.11	2.38	63.9	43.7	11.82
視野の広がり	2.98	53.7	43.4	6.27	2.55	45.6	51.1	-3.01	2.33	65.4	58.4	3.20	2.43	69.2	58.6	4.85
グローバルの一步	2.77	33.2	33.9	-0.31	2.56	38.3	29.2	4.14	2.50	43.1	25.7	8.20	2.65	20.3	28.7	-3.77
同世代発表	3.12	55.3	52.9	1.09	2.28	51.3	40.7	5.54	2.00	50.5	48.0	1.40	1.98	57.3	41.1	10.84
国内発表	3.02	49.5	43.4	3.01	2.45	56.0	40.7	9.55	2.34	58.7	45.3	8.02	2.31	61.3	36.4	16.59
国際発表	2.69	22.4	21.2	0.54	2.41	28.6	27.2	0.66	2.29	46.5	27.0	9.41	2.20	39.6	26.6	5.97
感覚の変化	2.90	51.2	46.6	2.60	2.17	59.4	54.3	2.37	1.96	55.0	54.5	0.22	1.99	54.8	58.6	-1.74
知識の変化	3.08	50.3	59.3	-4.46	2.59	60.5	43.8	10.19	2.49	50.1	53.2	-1.54	2.65	36.4	54.5	-10.08
仮説の変化	2.98	60.3	49.7	5.30	2.53	61.6	59.5	0.98	2.44	52.0	55.8	-1.80	2.59	41.8	54.0	-7.20
問いの変化	2.98	42.6	49.7	-3.56	2.65	56.8	59.5	-1.18	2.51	37.3	50.6	-6.74	2.57	43.2	53.5	-6.12
構造の変化	2.98	51.8	49.7	1.07	2.64	63.1	44.9	10.39	2.44	55.6	49.3	3.28	2.56	50.0	45.2	2.40
未知の創造	3.08	56.0	59.3	-1.50	2.51	52.0	54.3	-1.04	2.40	52.3	63.7	-5.49	2.42	47.7	59.2	-6.23
知識の創造	3.08	47.5	62.5	-7.93	2.59	55.9	58.4	-1.16	2.60	69.3	57.1	5.66	2.67	52.9	57.6	-2.17
思考の創造	2.98	25.8	52.9	-14.03	2.65	54.2	58.4	-1.91	2.54	40.4	53.2	-7.14	2.63	41.8	56.6	-9.76
価値の創造	3.10	45.8	52.9	-4.53	2.65	46.0	44.9	0.52	2.43	59.5	51.9	3.64	2.60	43.6	51.4	-4.16
概念の創造	2.94	49.4	43.4	2.96	2.50	48.9	44.9	1.93	2.41	63.2	57.1	2.75	2.52	52.2	50.4	0.88
平均	2.98	50.00	50.00		2.48	50.00	50.00		2.46	50.00	50.00		2.51	50.00	50.00	
標準偏差	0.11	10	10		2.56	10	10		2.39	10	10		2.49	10	10	

Ⅲ 学校設定科目「Well-Being I・II⁽²⁶⁾」の開発とシチズンサイエンス「ウェルビーイング市民公開講座」の実践〔仮説Ⅲ〕情報・数学領域を融合した「Well-Being I・II⁽²⁶⁾」を開発することによって、ウェルビーイングを目指した意思決定のために、データ駆動させる生徒を育成することができる。

質問	2年 n=209				1年 n=167			
	平均	重要度 指標	満足度 指標	改善 指標	平均	重要度 指標	満足度 指標	改善 指標
統計処理の仕方	2.91	56.1	64.1	-3.68	2.70	61.6	56.0	2.55
課題研究のレポートのまとめ方	2.77	60.2	56.0	1.91	2.73	46.9	52.9	-4.17
もっと深く学んでみたい	2.95	77.4	64.9	5.67	2.71	48.0	51.1	-1.84
今後の課題研究への活用	2.81	62.5	59.0	1.57	2.75	46.1	56.0	-6.21
探究と外的刺激や責任・義務感	2.61	42.1	50.9	-4.55	2.66	50.4	51.1	-0.32
探究と個人の興味や関心	2.64	45.1	52.6	-4.53	2.76	56.0	56.0	0.03
探究と個人の希望と展望	2.56	43.5	49.2	-2.79	2.75	56.4	56.6	-0.10
探究と学校や地域をよくする	2.55	42.9	48.8	-2.82	2.66	56.8	51.1	2.74
探究と人類・社会の幸せ	2.56	46.0	49.7	-1.81	2.76	57.0	56.0	0.47
グローバルな課題の発見や問題解決	2.67	52.4	54.3	-0.87	2.75	58.0	56.0	0.90
大学や専門機関と連携	2.72	51.8	56.9	-2.39	2.86	59.9	65.2	-2.40
地域や企業・自治体と連携	2.61	48.8	47.5	0.57	2.64	50.1	48.0	1.03
他のSSH指定校の研究を調べた	2.65	52.3	49.7	1.41	2.62	53.9	48.6	2.97
他のSSH指定校の生徒と交流	2.11	37.0	28.8	3.70	2.03	20.9	25.3	-1.99
SSHについての会話	2.33	43.0	33.1	4.58	2.43	38.4	41.3	-1.30
平均	2.25	38.9	34.4	2.05	2.25	39.8	29.0	4.94
標準偏差	2.61	50.00	50.00		2.63	50.00	50.00	



Well-Being I・II⁽²⁶⁾を履修していた2年生（社会探究コース、自然探究コース）とWell-Being I⁽²⁶⁾を履修した1年生の2学年について、満足度指標、重要度指標の二軸から重点維持項目（右上）、維持項目（左上）、重点改善項目（右下）、改善項目（左下）の要素を分類した結果が上の図である。Well-Being I・II⁽²⁶⁾で学んだ情報と数学を融合させた統計処理方法については「統計処理の仕方」については1学年・2学年とも重要度指標・満足度指標ともに高く、重点維持項目に挙がっていることからWell-Being I・II⁽²⁶⁾の内容が深く浸透している様子が伺える。「レポートのまとめ方」「今後の課題研究への活かし方」「統計処理を深く学んでみたい」の3項目に関しては、1学年は重要度指標が低く維持項目になっている一方で、2学年になると3項目すべてで重要度指標・満足度指標ともに高く重点維持項目に挙がっている。1学年でWell-Being Iで学んだことを応用し、2学年の課題研究に利用することで、更に統計処理について興味関心が広がっていることが想定できる。

その一方で課題であるのは、ウェルビーイングのルーブリックの各観点項目である。探究をまず責任や義務感から始めるなど自分事として捉え、次第に個人から地域社会の幸せを願い、最終的には人類や社会の幸せを願うという5段階のルーブリック評価でどこまで到達しているか、各学年の結果をみると、1学年では5観点全てで重要度指標・満足度指標ともに高く、重点維持項目に挙がっているが、2学年ではほぼすべての項目で重要度指標が下がっている傾向にあり、維持項目にとどまっている。1学年から2学年にかけてロジックリサーチ、プレ課題研究、課題研究と段階的により深くテーマを追求することで次第に自身が目指すウェルビーイングとは何なのかを理解し、そこに到達するまでのハードルが次第に上がっているのが要因ではないかと考えられる。生徒が目指すウェルビーイングはどのようなものであるのかは、非常に難しいテーマであるため、Well-Being I・II⁽²⁶⁾の科目だけでなく、すべての教科・科目で目指し、考えていく課題である。今後の探究的な活動や授業においても、生徒・教職員それぞれでウェルビーイングに対する意識を高め、ぼんやりした目標からより具体的な目標になるよう努力をしていかなければならない。

大学や地域、他のSSH指定校との連携についても調査をした。「大学や専門機関との連携」は1学年、2学年とも重点維持項目に挙がっており、2学年がより高い傾向にある。ロジックプログラムI・II⁽¹¹⁾の大学出前講義や、熊本大学と連携した課題研究中間発表会などで大学の先生の講義を聴いたり、ポスターセッションで助言指導を受けたりすることで、より連携が高まっているのが原因であると思われる。「地域や企業・自治体との連携」は重点改善項目になっている。1学年では未来体験学習⁽¹⁴⁾（企業訪問）を実施し、2学年の課題研究でも地域活性化の研究など増えてきているが、地元企業や自治体との連携も今後も深めていきたい。他のSSH指定校との交流や研究内容を調べたという項目に関しては、1学年、2学年とも改善項目になっている。テーマIIの分析でも挙がっていたが、本校の生徒や教職員だけでなく、他校の生徒や教職員、専門機関のアドバイスから探究活動をより深めるよう、今後も指導をしていきたい。

（２）教職員

令和 7 年 2 月に指導教諭、教諭、講師（非常勤を除く）、実習教師、計 42 人を対象に、Web フォーム（Google form）で無記名回答を実施する。量的調査として「①生徒の研究発表の指導を経て得た経験内容の人数」、質的調査として「②自身の授業における探究型授業、教科横断型授業への意識」、「③自身の探究指導における代表事例・キャリア教育と探究指導の関係、教科で扱う探究に必要なコンテンツ」を設問とし、回答者のカテゴリ設定として、「SS⁽¹⁵⁾・学際課題研究⁽¹⁷⁾担当教員」（主に数学と理科の教員 16 名）または「GS⁽¹⁶⁾・学際課題研究⁽¹⁷⁾担当教員」（主に数学と理科以外の教員 26 名）、「本校在籍年数 5 区分」（1 年未満、2～3 年、4～5 年、6～7 年、8 年以上）で得た回答を扱う。

また、SSH 意識調査アンケート質問項目（JST 実施）を選択肢回答法（Closed-ended question）・単数回答法（SA; Single Answer）で間隔尺度（強制選択尺度[4 件法 4：肯定, 3:やや肯定, 2:やや否定, 1 否定]）で実施し、回答をポートフォリオ（CS ポートフォリオ）分析する。「未知の事柄への興味が（好奇心）が向上する」を総合評価に設定し、個別評価要素の重要度指標と満足度指標を得て、重点的改善要素を抽出する。

【量的調査「①生徒の研究発表の指導を経て得た経験内容の人数」】

質問	SS ⁽¹⁵⁾ ・学際課題研究 ⁽¹⁷⁾ 担当 (数学・理科教員) n=16					GS ⁽¹⁶⁾ ・学際課題 ⁽¹⁷⁾ 研究担当 (数学・理科除く教員) n=26				
	1 年未満 2 人	2～3 年 4 人	4～5 年 4 人	6～7 年 3 人	8 年以上 3 人	1 年未満 5 人	2～3 年 5 人	4～5 年 1 人	6～7 年 4 人	8 年以上 11 人
①生徒の研究発表の指導を通して得た経験内容										
成果発表会代表選出経験	0	0	2	3	2	0	0	0	2	7
科学系コンテストまたは研究発表会に出展した経験	0	0	1	2	2	0	1	0	2	1
学会に出展した経験	0	0	1	2	2	0	1	0	1	4
国際研究発表に出展した経験	0	0	1	1	2	0	0	0	1	2
研究発表で表彰を経験	0	0	1	1	2	0	1	0	1	2

量的調査「①生徒の研究発表の指導を経て得た経験数」について、SS⁽¹⁵⁾・学際課題研究⁽¹⁷⁾担当教員は、本校勤務 2～3 年目までは夏と冬の年 2 回行われる成果発表会（UTO Well-Being 探究 Award⁽²⁰⁾およびロジック・スーパープレゼンテーション⁽²¹⁾）における代表生徒に選出された研究への関わりや、外部で開催される科学系コンテストや研究発表会へ出展する研究への関わりが少ないが、4 年目以降になればその関わりが見られるようになり、更には学会や国際研究発表に参加する研究へ関わる傾向が確認できた。SS⁽¹⁵⁾・学際課題研究⁽¹⁷⁾で学会や各種発表会への参加を目標とする生徒の指導や支援をすることができるよう本校に勤務する数学・理科の教員が変容する体制を構築できていると考えられる。GS⁽¹⁶⁾・学際課題研究⁽¹⁷⁾担当教員は、成果発表会代表発表選出のテーマ数が SS⁽¹⁵⁾・学際課題研究⁽¹⁷⁾と比べ若干少ないため、代表選出経験をもつ教員が限定されるが、SS⁽¹⁵⁾・学際課題研究⁽¹⁷⁾担当教員と同様に、本校勤務 2～3 年目から成果発表会の代表生徒に選出された研究への関わりや、ICAST や台湾研修などの国際研究発表に参加する研究へ関わる傾向が確認でき、8 年目以上となるとかなりの教員が生徒に対して何らかの関りで発表の出場経験を持っていることが分かる。今後も生徒だけでなく、教職員も積極的に課題研究に対しての研究発表の関わりや機会についてアプローチをしていきたい。

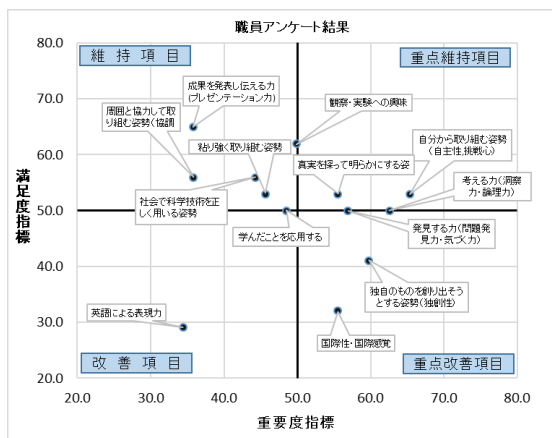
【質的調査「②自身の授業における探究型授業、教科横断型授業への意識」】

質問	SS ⁽¹⁵⁾ ・学際課題研究 ⁽¹⁷⁾ 担当 (数学・理科教員) n=16				GS ⁽¹⁶⁾ ・学際課題研究 ⁽¹⁷⁾ 担当 (数学・理科除く教員) n=26			
	そう思う おおいに	ややそう思う だいたい	あまり思わない すこし	そう思わない まったく	そう思う おおいに	ややそう思う だいたい	あまり思わない すこし	そう思わない まったく
②授業における探究型授業、教科横断型授業への意識								
教科・科目を越えた教員の連携を重視したか	18.8	37.5	25	18.8	11.5	46.2	30.8	11.5
探究に必要な資質・能力を向上させる取組を授業に入れることを重視したか	37.5	50	6.3	6.3	23.1	53.8	23.1	0
探究的な学びになる授業の展開を重視したか	18.8	56.3	25	0	19.2	53.8	26.9	0
「問い」を創る授業の展開を重視したか	37.5	50	0	12.5	19.2	61.5	15.4	3.8
生徒が授業中に探究の「問い」を創る機会を重視したか	25	37.5	31.3	6.3	15.4	53.8	23.1	7.7

質的調査「②自身の授業における探究型授業、教科横断型授業への意識」についての回答結果である。（数値の単位は％）全体傾向としては、すべての教員において「探究に必要な資質・能力を向上させる取組を授業に入れる意識や探究的な学びになる授業展開の意識」について肯定的な回答をした割合は 70％以上あり、数学・理科教員に関しては 80％近くに上る。また、「探究の「問い」を創る授業⁽⁶⁾の展開や生徒が探究の「問い」を創る機会の設定」について肯定的な回答をした割合はすべての教員で 80％近くあり、この結果に関しては数学・理科教員と数学・理科以外の教員について差はあまり見られない。4 月当初にすべての教員に対しての探究の「問い」を創る授業⁽⁶⁾の職員研修や、年間 2 回の探究の「問い」を創る授業⁽⁶⁾の公開授業などを経て、数学・理科の教員だけでなく、それ以外の教科の教職員にも探究型授業の展開を重視する意識がかなり強く表れていると考えられる。その一方で、「教科・科目を越えた教員の連携」に関しては、肯定的な回答をした割合が 60％程度に留まっている。探究型授業の定着は見られるものの、教科横断型授業に関しては、まだハードルが少し高いと感じる教員がいると思われる。教科横断型授業を実践することで、総合的な問題解決能力の向上、批判的思考力の養成、一つのテーマに対して複数の観点から学ぶことができる深い学びの促進など、生徒に多角的な視野と柔軟な思考を養うだけでなく、社会で活躍できる能力を育てるために非常に重要な教育手法であることから、今後も職員研修や公開授業、授業研究会で多く経験、実践してもらうなど教科横断型授業の取組を広めていきたい。

【ポートフォリオ分析：「未知の事柄への興味が（好奇心）が向上する」との関係要素】

質問	平均	重要度 指標	満足度 指標	改善 指標
科学技術・理科・数学の理論・原理への興味	3.3	68.2	61.9	2.84
観察・実験への興味	3.4	49.9	61.9	-6.04
学んだことを応用することへの興味	3.13	48.5	50.0	-0.76
社会で科学技術を正しく用いる姿勢	3.08	44.3	56.0	-8.18
自分から取り組む姿勢（自主性、挑戦心）	3.23	65.4	53.0	5.93
周囲と協力して取り組む姿勢（協調性）	3.38	35.8	56.0	-11.60
粘り強く取り組む姿勢	3.13	45.7	53.0	-4.65
独自のものを創り出そうとする姿勢（独創性）	2.98	59.8	41.0	12.88
発見する力（問題発見力・気づく力）	3.13	56.9	50.0	3.47
真実を探って明らかにする姿勢（探究心）	3.15	55.5	53.0	1.16
成果を発表し伝える力（プレゼンテーション力）	3.18	62.6	50.0	6.29
英語による表現力	3.58	35.8	64.9	-20.27
英語による表現力	2.65	34.4	29.1	2.39
国際性・国際感覚	2.75	55.5	32.1	12.94
平均	3.14	50.00	50.00	
標準偏差	0.24	10	10	



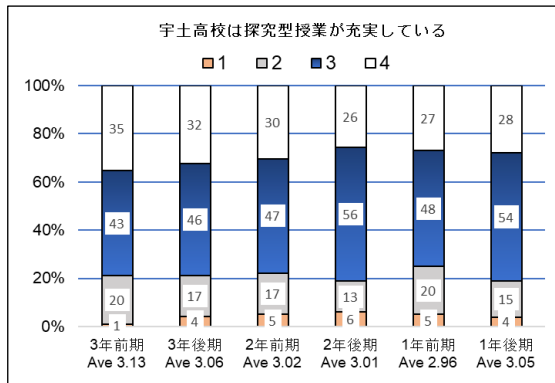
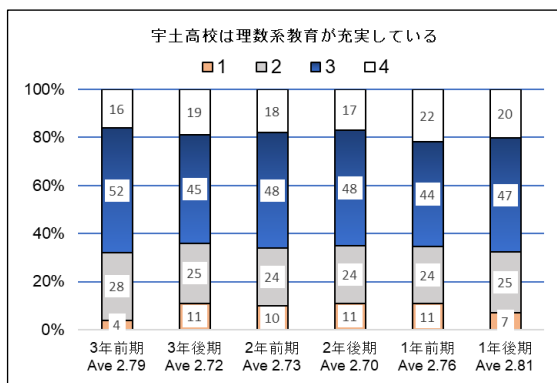
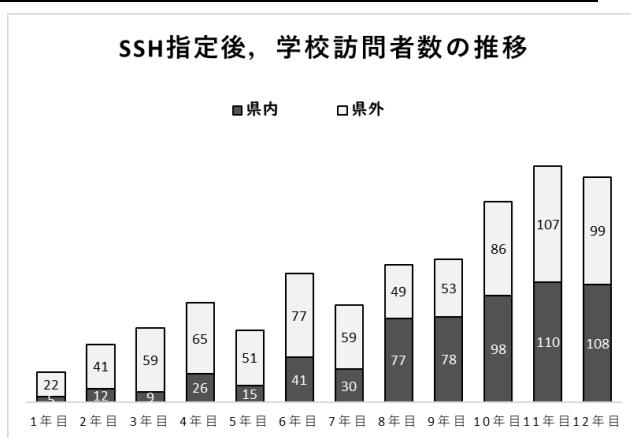
SSH 意識調査アンケート質問項目（JST 実施と同様の質問）を教職員に対して選択肢回答法（Closed-ended question）・単数回答法（SA; Single Answer）で間隔尺度（強制選択尺度[4 件法 4: 肯定, 3: やや肯定, 2: やや否定, 1 否定]）で実施し、回答をポートフォリオ（CS ポートフォリオ）分析した結果を上を示す。満足度指標、重要度指標の二軸から重点維持項目（右上）、維持項目（左上）、重点改善項目（右下）、改善項目（左下）の要素を分類した結果、「科学技術・理科・数学の理論・原理への興味」「自分から取り組む姿勢（自主性、挑戦心）」「真実を探って明らかにする姿勢（探究心）」等は重要度指標、満足度指標ともに高く重点維持項目に挙げられた。「発見する力（問題発見力、気づく力）」や「独自のものを創り出そうとする姿勢（独創性）」「国際性・国際感覚」等は重点改善項目に挙げられた。国際性については生徒のポートフォリオ分析でも「グローバル」の要素があまり高くなかったことから、生徒・教職員ともに同様の課題意識を持っていることが分かる。また、独創性については普段から探究の「問い」を創ることを意識した授業に臨むことで改善されることが期待される。授業や探究活動において、「思考・判断・表現」の観点を意識した指導と評価の充実、「主体的に取り組む態度」の観点を意識した探究の「問い」を評価するルーブリックの開発を目標に掲げてきたが（②実施報告書（本文）P. 15～18 および P. 32, 33 参照）、更なる改善が必要と考える。

2. 学校経営への効果

（1）併設型中高一貫教育校として、学際的な理数教育と探究の「問い」から価値を創造する授業デザインの実践

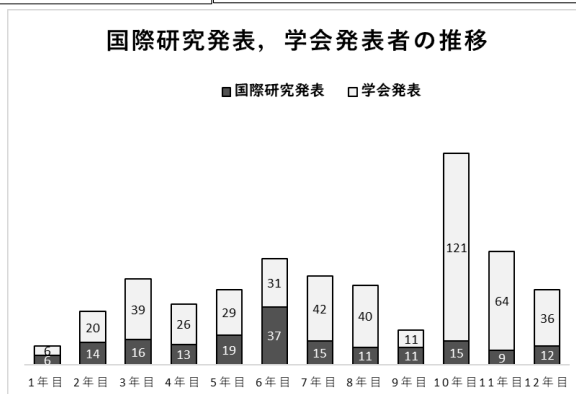
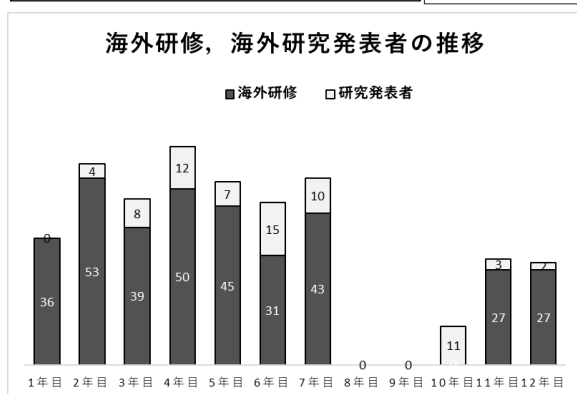
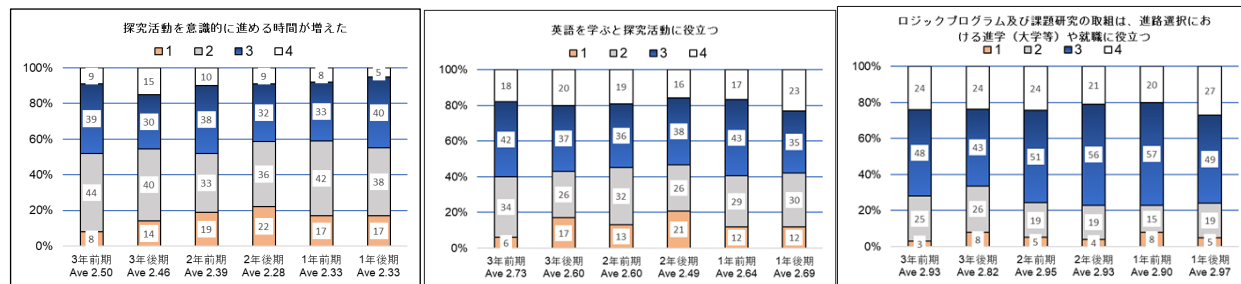
理科・数学の職員を中心に SSH 指定以降、様々な教育実践に取り組み、すべての教科・科目において評価と指導の一体化を目指し、その先にある生徒の学力向上を目指した授業をどうデザインするのかを各教科で考えることができた。その結果、生徒の学びを中心に据えた、主体的・対話的で深い学びの実現を目指す授業改革を進めることができています。

また、学力の三要素のバランスを重視した観点別評価の適正な実施のために、定期考査の見直しをはじめとしたすべての教科で探究の「問い」を創る授業⁽⁶⁾をはじめとする学習評価の方法を研究開発することを進めてきた。生徒アンケートでも「宇土高校は探究型授業が充実している」では8割、「宇土高校は理数系教育が充実している」と7割弱の生徒から肯定的回答が得られ、授業のねらいや実践が生徒に伝わっている様子をうかがうことができた。右表にあるように、学校訪問・授業見学で来校する教育関係者が SSH 指定以降増加し、お互いに意見交換を行うことで、他校の実践事例も共有することができ、本校の授業改革を活性化させる一助となった。



(2) 併設型中高一貫教育校として、社会と共創するために UTO-LOGIC⁽¹⁾ を駆使する探究活動の実践

令和 6 年度の探究部の目標として、「探究活動を通して、すべての生徒が学問や社会とつながる機会を設定する」という目標を掲げ、それに伴う数値目標として、「1 回以上外部と探究をする」ことを掲げてきた。特に SS 課題研究⁽¹⁵⁾や学際課題研究⁽¹⁷⁾に取り組む生徒は 12 月に行われる KSH 学びの祭典 (②実施報告書 (本文) P. 45, 46 参照) に全班が参加し、宇土高校の探究活動を他校生や中学生に示すことができた。科学部の活動も今年度は非常に結果を残し、SSH 成果発表会で奨励賞受賞、地学班の不知火研究では何度も新聞や雑誌に取り上げられる (②実施報告書 (本文) P. 58, 59 参照) など、本校の探究活動を広く内外に普及させることができた 1 年であった。そのような活動を新聞、雑誌、テレビ、ホームページ等で発信することで近隣中学生が進路選択するうえでの検討材料となっているといえる。グローバル教育の効果としては、台湾・静宜大学特別プログラムも構築でき、コロナ禍で中断していた海外研修や ICAST 参加も継続してできた。その結果、卒業後、海外大学に進学する生徒を毎年輩出している。



(3) 学校設定科目「Well-Being I・II⁽²⁶⁾」の開発とシチズンサイエンス「ウェルビーイング市民公開講座⁽²⁸⁾」の実践

SSH 指定を受けて 12 年が経過し、地元市民の方々にも本校のサイエンスに関する取り組みを十分理解していただき、更には一緒に多くの科学的な調査や研究に協力していただいている。取り組みの例として、3 つの例を挙げる。

- ・夏季休業中宇土市内の 5 つの小学校の児童を対象に「学びの部屋 SSH⁽²⁵⁾」と称して理科・数学の実験講座を実施しており、毎年多くの小学生が参加している。生徒は実験指導を行うだけでなく、小学生への自由研究のアドバイスを行う機会を通して、課題研究の経験や成果を拡げる視点を身につけている。
- ・学際課題研究⁽¹⁷⁾や GS 課題研究⁽¹⁶⁾には地域活性化に関する取り組みや、地域資源の研究に関する取り組みが多く存在する。地元の企業とタイアップしながら、地域の特産品を商品化する研究も存在する。地元宇土市に関連した研究を行った研究テーマを宇土市企画課に提出し、宇土市長賞と宇土市特別賞の 2 本を選出していただいている。
- ・科学部地学班の「不知火に関する研究」においては、7 年越しの観測を続けた結果、初の不知火の観測データ得られた。このデータは地元の漁師に協力を依頼したが、リスクが高いことから最初は依頼を断られた。しかし、研究に対する熱意を引き続きお願いした結果、協力をしてくださることになった。観測当日は観測場所の提供のために地元の神主に許可を得た。結果、多くの方の協力を得ながら観測に成功した。

このように、地元の小中学生や企業、漁師や神主など多くの方々にシチズンサイエンスとして本校の SSH 活動に参加していただいている。地元の小中学生は「SSH の活動ができるから宇土高校に進学したい」という声も多くある。SSH 活動は地域社会の科学技術の発展に貢献できる素養を持つことになるため、学校経営においては、今後も地域との連携を強化し、地域の課題解決に貢献できる人材を輩出することで学校の社会的な価値を高めていきたい。

